

猿新聞

編集責任者
山村 準

tel:0595-63-1725

Email

yun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部

赤目地区：150部

箕曲地区：70部

ひなち地区：60部

つつじが丘：430部

【全戸配布】

国津地区：380部

市民センター：90部

(9地区)

名張市議会：20部

名張市役所：20部

生態系管理は 人間の責任

江戸時代から明治にかけて二ホンジカ 以下シカと表記）は、乱獲によって地域的絶滅が危惧されるまでに個体数が激減し、分布域が大きく減退しています。その後80年にわたりメスジカの捕獲を禁止するなどの回復措置により、平成2年頃から生息数が急増。環境省の調査によると分布域も昭和53年に比べ平成15年には1.7倍に拡大しています。

平成23年度の推定個体数は環境省によるとシカは261万頭イノシシは88万頭と激増。被害総額は年間200億円に達したと言います。これを受け、平成25年から個体数半減を目標に個体調整の強化が図られています。個体調整とは、いわゆる駆除のことで、ハンターが行う狩猟と、行政が計画的、あるいは被害が多いとき特別に許可をして行う有害駆除（ここでは個体数

ミの絶滅は大きく影響しています。オオカミが絶滅後一世紀の間、人間の狩猟が野生動物の頭数を調整し増加が抑えられてきましたが、狩猟人口の減少や高齢化に歯止めが掛からない現在では増える一方。長い歴史の中で日本の自然の中では人間とオオカミが食物連鎖の頂点に君臨していましたが、オオカミ絶滅以降一世紀、生態系の管理は人間に委ねられ、人間の責任となっていました。

中山間地域では昭和30年代頃までは、農・林業の自衛のための有害鳥獣捕獲活動が盛んで、狩猟人口もピークの時代でした。当時は手作りの、くくり罠や箱罠を使用していた鉄砲はあまり使っていなかったようです。捕獲された獲物は肉、骨、毛皮など全て余すところなく、山からの贈り物として有意義に利用していました。ところが、近年では狩猟者の高齢化が進み若年層の参入も少なく、狩猟者の減少が進み、その確保が課題となっていて、狩猟者養成を

後押しする施策が必要といわれています。狩猟者が減少し有害鳥獣捕獲活動が年々難しくなっています。害獣の監視や生態調査にドローンを活用したり、山中に設置した罠にセンサーを設置することで、見回りの手間を減らすなど、最新情報機器の導入を待ち望まれています。近年、特に感じることに山に人影がなくなることです。かつての農山村では木材の伐採、薪炭作り、山菜採りや狩猟などで年間を通じて、山では人の声があふれ途絶えることはありませんでした。そのころでは、野生動物は人を恐れ奥山に潜んでいたのです。

何故いま集落周辺に野生動物がいるのか？温暖化や奥山の森林伐採・人工林化も原因のひとつかもしれません。人間が直接的な原因は人間が安易にゴミを捨てたり、雑草を繁茂させたりの非意図的な餌付け行為が誘引の原因となっていると考えられます。生態系保全のためには頂上の捕食者が必要」という議論と、西洋オオカミの放獣は危険」という議論の対立が続いているのが現状。提唱者の気持ちもわ

からぬものではありませんが、具体的な効果や弊害が見えない現状では、再導入論に対して肯定も否定も出来ないのが現状です。暫くは人間が食物連鎖の頂点に立ち全ての野生動物を調整・管理する以外の道はないように思っています。これまでの害獣対策を振り返るとき、野生動物による農作物の被害をどう防ごうか、といった直接的な防除に重点が置かれ生態系の保全や生物多様性の重要性には目を向けられてきませんでした。

外来生物の移入や森林の乱伐など人間の活動によって生態系が攪乱され危機に瀕しているというところ踏まえ、今後は、生態系のバランスをいかに保つかというところが害獣対策の鍵となります。先日報じられたNHKの集計によると、今年度のクマによる人的被害は125人に及び、昨年度比2.5倍。東北・北陸地方や岐阜の山の奥の凶作が原因で、人里の柿を狙って出没しているようです。

伊賀市が地域住民に注意喚起。伊賀市は、令和元年10月25日伊賀、津両市の桜峠付近で熊の目撃情報があったと発表。市は生ごみなどを屋外に放置しないよう呼びかけています。桜峠というが高尾付近だと思えます。名張市とは目と鼻の先です。十分な注意が必要です。この時期、不用不急の山行きは避けられた方が良いでしょう。クマは冬眠前が最も危険です。熊よけ鈴 どうしても山に行かなければならないときは、熊よけ鈴を携帯することで安心が得られますが、過信は禁物。熊よけ鈴の効果については諸説ありますが、携行していれば必ずクマに襲われないというものではありません。

伊賀市付近でもクマ目撃情報 ☆クマに出遭わないことが肝心。クマの人的被害は命に関わります。☆クマ鈴など音の出るもので自分の存在を知らせましょう。☆クマに出会う恐れのあるところでは走るのは禁物です。近年、ワイヤーメッシュなどで農地を囲む侵入防止柵をよく見かけますが、困っているつもりでも、動物に効果のある困いになっていない柵が非常に多く、特に、柵の設置の仕方や管理に問題がある事例を多く見かけます。イノシシやシカは優れた跳躍能力を有していますが、柵を飛び越すよりもぐり抜けることが多いです。柵の切れ目や地際から侵入

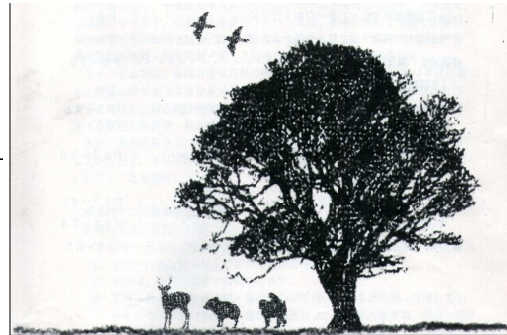
一服ツヨク 物が植物から摂取した栄養もえることができるからです。肉食動物は胃の中には先ほどまで草食動物が食べていた草が消化されずに残っていますし、また骨や内臓を食べることもできます。ライオンやチーターが獲物をしとめると、最初に内臓から食べ始めるのは栄養を考えているからです。草食動物を食べることによって間接的に植物の栄養も摂取しているのです。

https://www.iszkakk.net/nikusyoku.html から引く。

伊賀市付近でもクマ目撃情報

肉食動物 栄養は偏らないの？ 人間は肉、野菜の両方を食べることで栄養のバランスを保っています。しかし、ライオンやチーターなどの肉食動物はシマウマなど草食動物ばかり食べています。草食動物ばかりだと栄養が偏って体を健康に保つことができません。しかし、肉食動物は草食動物を食べることで必要な栄養素を摂取することができます。なぜなら草食動物を食べれば草

令和元年度 獣害につよい三重づくりフォーラム ~みんなで実践できる獣害対策~



去る11月13日、三重県主催による「三重づくりフォーラム」が三重県総合文化センターにて開催され、名張鳥獣害問題連絡会会員全員が参加させていただきました。

このフォーラムは毎年恒例で開催されていますが、参加者は毎年うなぎ登りで増加しています。今年度は各駐車場は全て満車。会場は立錐の余地のないほどの満員盛況で鳥獣害の深刻化が年々拡大しているという肌で感じた次第です。

フォーラムの概要
開会挨拶
三重県副知事 渡辺 信一郎氏
県内の優良活動の事例発表と表彰
電山市関南部地区まちづくり協議会「ゼロから始める捕獲と被害防止の活動」
取り組み内容
関南部地区の久我自治会有志5名で捕獲チームを編成、2名が狩猟

去る11月13日、三重県主催による「三重づくりフォーラム」が三重県総合文化センターにて開催され、名張鳥獣害問題連絡会会員全員が参加させていただきました。

免許を取得し、シカ、イノシシの捕獲を開始した。その結果、たゆまぬ熱意と努力で3年10ヶ月の間に260頭を捕獲した。くくり罠による捕獲がほとんどで、事故がないように注意を払って捕獲体制をとっている。

捕獲している久我自治区では農作物の被害はほぼなくなった。また、日常生活における野生動物の出没による不安が軽減された。動物の隠れ家、棲家を無くすため、耕作放棄地の草刈りや、市道、林道沿いの雑木伐採で里山の保全管理、環境改善が進んだ。

関南部地区では文化部門員によるジビエ料理の研究やまちおこしイベントなどでカレー、シチュー、唐揚げなどに調理して参加者に振る舞っている。以上が三重県知事表彰となった。電山市関南部地区まちづくり協議会「の取り組み内容です。」

「イノシシの生態と行動に基づく農作物被害対策」
農研機構 西日本農業研究センター 鳥獣害技術グループ 上田 弘則氏
被害対策の基本的な考え方
野生動物による農作物被害対策の基本は、次の三つの総合対策。
・集落を動物が出にくい環境にする。
・田畑を正しく柵で囲う。
・加害個体を捕獲する。

冬場の餌付けはサルを増やします

冬から早春にかけては、森林の中のサルの餌が乏しくなるため、サルが他の季節より大胆に農地や集落に出没します。さらに、日当たりがよく暖かい場所や餌が簡単に入手できるような特定の場所を中心に生活するようになります。農作物被害の減少を目指して、効果的な被害対策を進めていくためには、冬期の栄養源につながる餌を無くし、集落へ依存させないことが大事なことです。

山の餌だけを食べているサルは毎年出産でまかせん。ある年に産んだら、翌年は休み、その次の年は産んで、翌年というように、大体2年に1回しか産まないのです。

山の餌だけを食べているサルは毎年増加率は、1年にわずか1%です。100頭の群れでも翌年は1001頭にしかありません。山のサルは、短期間に急増することはありません。

一方、農作物に依存しているサルたちは、性成熟が早く初産年齢は4〜5歳とはやく、毎年の出産が可能になり、冬の死亡率が下がるといって3つの要素が重なって、個体数の平均増加率は10%以上となります。100頭の群

れが、110頭に増えるということになる。冬場にサルに農作物を食べさせるのは、サルを増やすことになり。今、人里近くで暮らすサルは、奥山の暮らした時から人目を盗んで畑の作物を食べ、その美味しい味を知っているのです。人里の近くにいることが当たり前と認識していま

サル出没状況

A群の状況報告は、古川 高志さん

A群は、11月は青蓮寺湖とひなち湖周辺に居ついていて、木の実や葛の実、山栗を食べ

今冬は、農地では冬野菜やかんきつ類などが実っており、収穫前の作物のほか、収穫時に選別して圃場周辺に放置した野菜くずや廃果をサルが狙います。

このように農山村や近郊都市には、農作物以外に生ごみ、廃棄農産物を誘因するものが多くあります。このようなものの処分を適切に行うことが最も有効で大事な対策です。

今冬は、農地では冬野菜やかんきつ類などが実っており、収穫前の作物のほか、収穫時に選別して圃場周辺に放置した野菜くずや廃果をサルが狙います。

編集局より 一年間の御礼

猿新聞も創刊より、今号で162号と相成りました。この間、多くの方に「愛読いただきましたこと」を厚くお礼申し上げますと共に、今後とも「一層のご支援、ご愛読をお願い申し上げます。」

来る、新年が皆様にとって平穏で多幸な年となります様、ご祈念申し上げます。

今冬は、農地では冬野菜やかんきつ類などが実っており、収穫前の作物のほか、収穫時に選別して圃場周辺に放置した野菜くずや廃果をサルが狙います。

今冬は、農地では冬野菜やかんきつ類などが実っており、収穫前の作物のほか、収穫時に選別して圃場周辺に放置した野菜くずや廃果をサルが狙います。

今冬は、農地では冬野菜やかんきつ類などが実っており、収穫前の作物のほか、収穫時に選別して圃場周辺に放置した野菜くずや廃果をサルが狙います。

